

原 著

## 中高年女性の加齢に伴う「獲得」に関する語りの分析

生き方の違いによる比較から

中澤 明美\*・長田 久雄\*\*

### Gains with aging in middle-aged and older women

Akemi Nakazawa\*, Hisao Osada\*\*

#### Abstract

The purpose of this study was to explore psychosocial gains through aging in middle-aged and older women with varied lifestyles.

Participants included 12 healthy women living in Tokyo. They were divided into three groups: the group 1 included single women with a career; the group 2 included married women with children and a career; and the group 3 included married women with children and no career.

Retrospective data were obtained from semi-structured interviews, and the data were categorized.

Sixteen concepts such as “Ability of Self-control” and “Consideration for Others” emerged.

Among these concepts, “Appreciation for Others” and “Patience” were found in all three groups.

Five categories including “Less Egoistic Attitude”, “Ability to Control Emotions”, “Expanding Relationships”, “Ability of Human Relation”, and “Ability to Adapt”, emerged from the concepts.

**キーワード：**中高年女性 (middle-aged women) 加齢に伴う「獲得」(aging gains) インタビュー (interview)  
(Key Words)

## 1. はじめに

これまで青少年の老人イメージに関する研究は多くみられるが<sup>1)2)3)4)</sup>、日本の若者が「老い」に対してプラスイメージを抱いているとは言い難い。過去の経験や伝統が重んじられる社会では老人には高い社会的地位が与えられるが、現代のような産業社会では個人の業績や能力が重視され、結果として老人の地位は低下し、老年者は、衰退と低下の道をたどった人としてイメージ化されやすいと考えられる。

人が年齢を重ねることは、本当に低下と衰退、

喪失だけなのだろうか。また、年齢を重ねることにはどのような価値があるのだろうか。人は年齢を重ねる中で「何を得て(獲得)」きたと考えているのだろうか。

Baltesは<sup>5)</sup>、発達のいかなる過程も成長(獲得)と衰退(喪失)という側面をとまなうと主張している。そして、生涯発達、獲得と喪失のダイナミクスによって影響を受けつつ進行すると考えられている。この考え方はかなり最近のものであり、その理論的基礎はいまだ十分に追求され検討されていない。と述べている。すなわち年齢を重ねていくことの価値を「生涯発達」の視点でみる

\* 共立女子短期大学看護学科 (Kyoritsu Women's Junior College)

\*\* 桜美林大学大学院国際学研究所 (OBIRIN University)

受稿2007.5.27 受理2007.7.10

ことは注目に値するが、その内容は明らかになっていない。

最近の成人期・老年期における発達の研究の動向をみると<sup>6)</sup>、生涯発達理論構築の試みや成人期の発達の特徴とその要因分析、親子関係や夫婦関係など成人期の家族に関する研究、老年期の研究では高齢者の語りや配偶者との死別の意味、定年退職への適応など様々な視点の研究がなされている。加齢に伴う低下や衰退に関する研究では、若本<sup>7)</sup>の成人期・中年期における主観的老いの経験の検討がある。しかし、日本の中高年者自身の発言を基に、年齢を重ねることの価値を「獲得」という視点から考察した研究は少ない。

成人発達研究のなかで代表的な理論とされるLevinsonの成人発達モデルは<sup>8)</sup>、4つの職業群に属する40名の中年期男性の個人史を分析して導きだされたものである。柏木と高橋<sup>9)</sup>も指摘しているようにこれまでの心理学的研究や心理学理論の多くは、男性研究者の手によるものであり、研究対象も男性を主にしたものであった。この反省から最近、成人女性の生涯発達に関する研究もみられるようになった<sup>10)</sup>。Levinsonのライフサイクル論については、1996年に女性の発達論が発表されている<sup>11)</sup>。

岡本は<sup>12)</sup>「かつて女性の一生はきわめて固定的、画一的なものであった。しかし今日、女性が社会で活躍する道は確実に広がっており、女性の人生の選択肢は一昔前にくらべ確実に増加している。このような多様な生き方は多様な価値観を育むことができると考えられる。」と述べている。女性の異なる生き方は、加齢に伴う獲得に対する実感という個人的価値観にどのような影響を与えるのだろうか。女性の生き方の違いによる研究では、堀内<sup>13)</sup>の自我同一性の変化について、専業主婦、看護婦、教師を比較した報告がみられるもののその数はまだ少ない。

そこで、本研究の目的は、研究対象を異なる生

き方をしてきた中高年女性を対象とし、中高年者自身のインタビューデータを基に人生における「獲得」の内容を明らかにし、人が年齢を重ねることの価値を検討することとした。

人は年齢を重ねるなかで何を得ていくのか、その内容を明らかにすることは、高齢者理解の一助となるばかりでなく広く「生きることの価値」を考える基礎としての意義があると考えられる。

## II. 方法

### 1) 協力者

協力者は、東京都内とその近郊に在住する入院加療していない障害のないインタビュー可能な中高年女性である。岡本<sup>12)</sup>は、女性のライフスタイルを6カテゴリー（既婚・有子・専業主婦  
既婚・有子・職業復帰  
既婚・有子・仕事継続  
既婚・無子・仕事有  
未婚（離婚）・有子・仕事有  
未婚・無子・仕事継続）に分類し「個人志向性」「社会志向性」の違いを報告している。そこで本研究では、この6カテゴリーの分類を基に婚姻の有無、子供の有無、職業の有無を考え既婚・有子・専業主婦  
既婚・有子・職業有り  
未婚・無子・職業有りの3グループを設定しこのライフスタイルのいずれかに当てはまる者であることを前提とした。また、本研究は個人の生き方に関わる情報を得て評価するという可能性が高いためいずれも知人からの紹介者で研究の主旨を理解して同意の得られた者とした。

独身で仕事を継続している女性を〔グループ1〕、結婚子育てをしながら仕事を継続している女性を〔グループ2〕、職業を持ったことがなく専業主婦として子育てをしてきた女性を〔グループ3〕として各グループの人数は同数にし年齢は50歳代、60歳代に限定した。

協力者の内訳は（表1）の通りである。

(表1) 対象者のグループ別背景

グループ	事例番号	年齢	職種
1.独身で仕事を継続している女性	1	56歳	教員
	2	55歳	事務職
	3	52歳	管理職
	4	50歳	看護師
2.結婚子育てをしながら仕事を継続している女性	5	62歳	管理職
	6	67歳	教員
	7	67歳	自営業
	8	53歳	看護師長
3.職業を持ったことがなく専業主婦として子育てをしてきた女性	9	50歳	
	10	58歳	
	11	69歳	
	12	57歳	

## 2) データ収集

上記協力者に対して半構成的インタビュー調査を行った。インタビュー内容は、協力者の背景としての年齢、婚姻の有無、職業の有無、子育て経験の有無の4点。「年齢を重ねて得たと思うもの」とそれにまつわるエピソード(話しの流れのなかで年齢を重ねて失ったと思うものについても含めて)自由に語ってもらい必要に合わせて質問し具体的に詳しく語ってもらった。従来から老年期は衰退・喪失の時期と捉えられているが、今回の研究は、喪失をどのように意味づけるかや喪失体験を獲得に変えるプロセスを明らかにするものではない。現時点での年齢を重ねたことによる「獲得」に対する個人的な考えである。その中には喪失体験が獲得につながっているものもあると推測されるが、それは獲得に対する語りの中で話してもらった。インタビューに対しては主旨を理解し内諾の得られた者に実施した。1週間前にインタビュー内容を説明し考えをまとめてからインタビューに臨んでもらった。相手の発言が途絶え、質問を促しても回答の得られない段階で面接を終了した。面接時間は1時間以内であり、インタビュー内容は、承諾を得て録音し録音内容は全て逐語的に書き起こし記述データとした。逐語録の文字

数は31000字程度である。

倫理的配慮として、インタビューをはじめる前に文書で主旨を説明しデータは個人が特定されないこと、本研究以外には使用しないこと、知り得た事柄については決して口外しないことを確認して「研究承諾書」に月日と氏名のサインを得た。

データ収集期間は2004年3月から9月までである。

## 3) 分析方法

方法は、質的方法を用いた。質的方法は、量的方法では伝えることが難しい現象の持つ複雑で難解な中身を詳細に記述することも可能である。中高年女性を対象とした生き方や生きがい感に関する量的研究<sup>14)</sup>はみられるが対象者自身の言葉から分析した研究は少ない。本研究は、中高年女性の加齢に伴う「獲得」という個人の人生経験を基盤として構築される人生観や価値観を明らかにするため個別の面接を通して一人一人の語りによる個別データからの読み取りを重視した。

分析は、修正版GTAに準拠する方法で行った。GTAはデータを概念化することが分析の第一歩となる。データを概念化するには、観察や文章、段落をばらばらにしそれぞれの考え、出来事に対し

てその現象を意味し表す名前を与える。しかし、言葉を切片化することによるわかりにくさが指摘されていた。修正版GTAでは言葉を切片化することなく文脈を切り取り、同類のものを1枚のシートにまとめるという方法をとるため今回の記述データである加齢に伴う「獲得」の内容を明確に表すことができる。また、概念の命名には情報提供者自身が使用した言葉（“in vivo” code）による命名法を中心にするので「獲得」の内容を多くの人が用いる生きた言葉で表現するようにした。

〔グループ1〕の4名について、一人目の記述データを何度も読み返しデータに慣れ、切片化しないで年齢を重ねて得たもの（獲得）と思われる部分に印を付け着目箇所とした。その箇所を異なるシートに抜き出し、発言者番号を付けた。二人目の記述データも同様に獲得と思われる部分の着目箇所を異なるシートに抜き出した。この作業を繰り返して各シートの内容が同様のものを1枚にまとめ、その内容を端的に表す短い言葉を概念として命名した。〔グループ2〕の4名、〔グループ3〕の4名についても同様の作業を繰り返し3つのグループの概念を抽出した。次に、各グループの概念をもとに生き方の違いによる「獲得」の内容の共通点と相違点について概観した。さらに、概念間のつながりからカテゴリー化し、中高年女性の年齢を重ねて得たもの（獲得）について内容の抽出を行った。

#### 4) 概念生成の一例

グループ1のひとつの概念の生成過程を例示する。

事例1では「若い時って、やっぱり自分中心、年取っても自分の気持ちはあるんだけど、やっぱり相手の立場とか考えられるようになるのかな・・・」の文脈に着眼しシートに抜き出した。事例2では「歳を重ねて、例えば、家の者とかの関係でも、なんというか、思いやりのない態度と

かっていたと思うんですけど30代から40代と、母との関係ですけど、あちらも高齢になってきて立場が逆になってくると、そういうのって一定の歯止めがかかるようになるんですね。」の文脈に着眼した。事例3では「思いやりの気持ちとか、は強くなっているなーと思う。無かったわけじゃないんですけど、そんな、しみじみとしなかったんですよ。特に、母と過ごしている時を振り返ると、ほとんど、母のペースに合わせるというか・・・というのは、あるのね。前だったら、あとちょっとだから頑張ろうよ、みたいな感じでこっちのペースに合わせたかもしれないんだけど、年をとっている人のつらさがわかるというか、年取っているひとのペースとかあるじゃない、それに合わせる、相手のペースに合わせる、年取っている人の身体のことをほんとにわかってきたというか、それは、自分が年をとることで分かってきたのかな・・・って思う。それは、頭でわかったとかいうのでは無くて、自分の実感として・・・」の文脈に着眼した。これらの内容は、年齢を重ねることで相手の立場を理解できるようになりそこから他者を思いやる気持ちを獲得していった様子が語られていた。そこでグループ1では、この3例を同じシートにまとめ概念名を「思いやりの心」と命名した。なお、概念の命名については、大学院で老年学を専攻する学生3名の協力を得た。

### III . 結果

最初に各グループごとの分析結果を示す。概念名は 実際のインタビューデータは「 」楷書体で示す。語りはなるべくそのままの形で記述しているが、一部、直接関係ないと思われる箇所は省略している。また、データの最後に対象者の事例番号を示す。

#### 1 . グループ1 : 独身で仕事を継続している女性

〔グループ1〕では、思いやりの心 冷静な心 柔軟な心 感謝する心 自律する力 耐える力 判断する力 他者から学ぶ力 の8つの概念が抽出された。以下に具体的な語りの内容の一部を示す。

思いやりの心 は「思いやりの気持ちとか、は強くなっているなーと思う。無かったわけではないんですけど、そんな、しみじみとしなかったんですよ。特に、母と過ごしている時を振り返ると、ほとんど、母のペースに合わせるというか・・・というのは、あるのね。前だったら、あとちょっとだから頑張ろうよ、みたいな感じでこっちのペースに合わせたかもしれないんだけど、年をとっている人のつらさがあるというか、年取っているひとのペースとかあるじゃない、それに合わせる、相手のペースに合わせる、年取っている人の身体のことをほんとにわかってきたというか、それは、自分が年をとることで分かってきたのかな・・・って思う。それは、頭でわかったとかいうのではなくて、自分の実感として・・・」(事例3)に示されるように年齢を重ねることで相手の立場を理解できるようになりそこから相手を思いやる気持ちを示す。

冷静な心 は「若いときって、すぐかっとなるというか、自分でも攻撃的になることってあったような気がするんですよね。でも、例えば、相手が多少自分の気に入らない行動とったり、まあ、やりとりがあったとしても、ちょっと自分の気持ちが抑えられる、人間的に穏やかになったかなと思うんです。」(事例2)

に示されるように自分の感情をコントロールし冷静に対応する力を示す。

柔軟な心 は「こっちが正しいと思っていても、あっと、途中で思ったときとか、素直に謝るとか、そういうもの年齢とともに発達していったかなと思う。相手を許せないというのはなくなった。」(事例1)のように自己の非を認め、相手

を許す寛容さを身につけていったことを示す。

感謝する心 は「感謝の気持ちでは、健康に対するありがたさ・・・自分がだんだん衰えてくるでしょ、だからね・・・健康で働き続けてこられたという、感謝の気持ち・・・大きな病気せず、入院とかもせず、きたから、こういう風に育ててくれた、こういうふうに生んだくれた親にもね、感謝する気持ちがあるの、そんな環境を作ってくれたり、育ててくれたりというのがあったらうな、って・・・子供を育てた人って、育てたことで親のありがたさとか感じるとかいうのがあったらうじゃない、でも、そういうのはなかったから、改めて感じるのかな・・・丈夫な身体に生んでくれたとか、生き方も無鉄砲さみたいなものないじゃない、そういうのも親が、そう育ててくれたのかな、と思う。」(事例3)のように健康で仕事を継続することができた現状に感謝する気持ちを示す。

自律する力 は「どんな人にも美醜にかかわらずその人自体が一番輝いているというか・・・いわゆる青春の輝きというのがありますでしょ、あれが、なんというか、自分が持っていたオーラみたいなもの・・・それが、除々に失われてきますね。(中略)そんな輝きみたいなものは失われていきますよ。周りの反応もそれにつれてそれなりに減ってきますよ。でも、逆にそういうのが失われてくると、今度は自分の中で、今まではちやほやされて当たり前だったけど、そうではなくて、今度は、自分の頭で考えて行動して、というか、それはしなければいけない、という自覚ができてきますし、それなりに考えているようになるし、成長しますね。それが、獲得したもの・・・」(事例2)のように若いというだけで許されていた時期を過ぎ、自分自身で考え自律していかなければならないことを自覚し行動していく様子を示す。

耐える力 は「忍耐強さとか、今まで、係員だったけど、係りの長になったときとにかく忍耐強さとか求められてきて、そういう周りの環境か

らも求められて、身についてきたというか、自分自身それは経験的なものでしょうね。」(事例2)のように仕事を継続するなかで我慢し耐える力を身につけていったことを示す。

判断する力 は「状況判断力とかはアップしたかな・・・」(事例1)「判断力とか身につけてくるよね、それは仕事のなかで、強化されている。」(事例2)のように仕事を継続する中で様々な状況下での判断する力を求められ強化されていったと自覚することを示す。

他者から学ぶ力 は「老いていく自分を受け入れられなくてうつ傾向になったとき、生き生きしているお年寄りたちを見て自分はこんなになっている場合じゃないぞと思って、自分の出来る範囲で背伸びせずやっていけばいいんだと思ってすごく楽になってふっきれたような感じになりました。」(事例4)「人の姿とか見て気づいていく、これは年取って一番得たものかな」(事例1)のように他者の存在から様々なことに気づき学んでいくことを示す。

## 2. グループ2：結婚子育てをしながら仕事を継続している女性

〔グループ2〕では、自分を知る 誰かのために存在する 血縁のつながり 自律する力 耐える力 感謝する心 考え方の広がり の7つの概念が抽出された。以下に具体的な語りの内容の一部を示す。

自分を知る は「仕事をして得たことは、研修を受けるたび自分がいかに「物知らずか」ということを実感するの、文章が下手だったの、だからこれは文章書かなくちゃって思って、それで文章書くには本読まなきゃいけないでしょ、それで、本も読んで、だいぶ実行した。」(事例6)のように自分自身の能力を自分でわかり納得することを示す。

誰かのために存在する は「人のために何かで

きるってすごいことだな、と思うのね、自分のことだけじゃなくて、人のために・・・それは、家族だったり、友達だったり・・・誰かのためにできるの、それが、年取ってくると自然体でできるようになってくるの・・・身に付いてくるのかな・・・人間はやっぱり、自己実現といってもそれは、人との関わりの中でのことですよ、だから、SMAPの世界でただひとつだけの花とかいうのあるでしょ、あれは、確かに一面性はあるんだけど、あれは、やっぱり若いときの認識よ。自分は、確かに一人だけなんだけど、他の人のことも考えられる。それが、年取ってくるとうことかな、と思うのね。」(事例5)のように人との関わりの中で誰かのために何かができる、自分の人生は自分だけのためにあるのではないということを示す。

血縁のつながり は「得たものは、やっと孫に恵まれてそれが一番の宝物です。」(事例7)「得たものは家族関係で、小姑、舅、姑もいます、いろいろなことがあったけどこの中で自分の存在があるんだと思えるようになったこと」(事例8)のように結婚により家族が増え、子孫繁栄していくことを獲得と感じていることを示す。

自律する力 は「仕事をもっていると、普通の主婦が持てる対人関係とは違う、対人関係とかも持てるから、あと、仕事を通して自分なりの考え方ができるようになってきたということかな・・・それは、仕事を辞めても自分の根底に流れているというか、そんなものってあるでしょ、もちろん、専業主婦だってあるんでしょうけど、やはり仕事って社会と直接につながっているから、普通の専業主婦の人よりは、ちがった見方もできているんじゃないかと、そんな大それたことじゃないんだけどね」(事例5)のように仕事を継続することで人間関係を広げ、自分なりの考えを持つことができることを示す。

耐える力 は「昔は、短気で怒りっぽかったんですけど、年をとって、少しは忍耐というものが

できましたし、昔は、イヤだと思っていたようなことも我慢できるようになりましたから、少しは、忍耐力ができてきたのかなということ、まだ子育てしている頃は、結構かっか、することがありましたから」(事例7)のように年齢を重ねるなかですぐに短気を起こすことなく我慢する力を付けていったことを示す。

感謝する心 は「看取ったという達成感というか、やれば在宅介護もできるというか、苦労超えると感謝する気持ち・・・だから、たいへんとか苦労とかじゃなくて、最後まで、いろいろ介護とか教えてくれて、ありがたい母だな、という気持ち」(事例6)のように苦労と思われることも自分を成長させてくれたことと受け止め、感謝の気持ちを示す。

考え方の広がり は「物事を肯定的にみる、否定的にみるのではなく、だからどうしようか、と発想の転換・・・そういうのはできるようになったような気がする。」(事例8)のように一方向だけでない物事の受け止め方、考え方ができるようになっていくことを示す。

### 3. グループ3：職業を持ったことがなく専業主婦として子育てをしてきた女性

〔グループ3〕では、感謝する心 思いやりの心 信頼できる友 血縁のつながり 親としての役割 耐える力 他者から学ぶ力 関係を築く力 楽に生きる の9つの概念が抽出された。以下に具体的な語りの内容の一部を示す。

感謝する心 は「結婚して42年ですが、あちこち身体は故障がきているんですが、寝込むとかそういうのはなくて、健康であることが、ありがたいという気持ち、幸せだと思う、これを得たかな、と思いますね。」(事例11)のように健康で生活してきたことやしていることを幸せと思い感謝の気持ちを示す。

思いやりの心 は「昔は、自分が上だと思いた

い・・・でも、今は、自分が年上でも相手のことが思いやれる」(事例9)のように相手がどのような立場であろうと思いやることができることを示す。

信頼できる友 は「一番、うれしいのは、話しを聞いてくれること、わかってくれる友達がいること、だから、つらくなると、今日一緒にご飯食べてとかね・・・だから、友達は得たものね」(事例10)のように生活の愚痴を話し合える友を得たことを示す。

血縁のつながり は「得たものは、夫婦で子供に愛情を持って育て苦労を共にした長い時間を重ねるうちに切っても切れない強い絆ができたことです。それぞれの両親、兄弟の愛情も深い絆となりほんとに大切なものと心から思うようになりました。子供も結婚してかわいい孫も誕生し人生は順々に回って生きていることを実感します。」(事例12)のように結婚により家族が増え、子孫繁栄していくことを獲得と感じていることを示す。

親としての役割 は「若いときは時間がいっぱいありましたので色々失敗もしました。しかし、この年齢になって考えてみれば失敗や失ったものは人生勉強だと思います。失敗したことは、子育て・・・もっともっと愛情を持って接していればよかったと思いますよ、もっと抱きしめてあげればよかったと・・・こどもの教育は親の思うようにルールに乗ってくれなくて悩んだこともありました。けど、子供はそれぞれに自我が芽生え自分で決めた道に進んでいったことが、今になってこれでよかったとやっと思ふようになりました。」(事例12)のように子育てを振り返り失敗や後悔をしながらも親として役割を果たしたことを示す。

耐える力 は「介護の中から、得たものはありますよ・・・忍耐力かな・・・忍耐力はあるほうだと思っていたんだけど、今は、もう、確実に、だって、放棄はできないんだもの」(事例10)のように親の介護という日常生活の中から耐える力を

得たと感じていることを示す。

他者から学ぶ力 は「友達から得るものが大き  
いかな。Kさんという、すごく親しくしている方  
がいるんですけど、いろんなことあるんだけど前  
向きで、だから、ほんとみていて得るものがあり  
ますね」(事例9)のように友人など他者との関わ  
りを通して学んでいることを示す。

関係を築く力 は「得たものは、人間関係を築  
けるようになった。私は、もともと若い頃から、  
人間関係が上手いかないというのがあって、そ  
う思っていて、どうしてだかうまくいかないとい  
うのがあって、学生時代からそう思ってい  
て……それが、だいぶ変わってきたのが、38  
のときに父が亡くなったんですね。自分が幸せな  
ときじゃなくて、そういうときに、人間関係がい  
かに大事かということがわかってきたの、上手く  
やっていくにはどうすればいいとか」(事例9)の  
ように人生経験を重ねることで人間関係の大切さ  
に気づき関係を築くことができるようになったと  
感じていることを示す。

楽に生きる は「前は、いつも自分をよく見せ  
たいというのがあって、人としゃべれなかったん  
です。でも、とても、楽になりましたね。昔だっ  
たら、もしこういうの(インタビュー)があっ  
てもきっとしゃべらなかった、今日も別にこうい

話ししようとおもって来たわけじゃないんだけど、  
自然に出ちゃったんですよ。自分が、謙虚になっ  
た気がする。」(事例9)のように虚栄心を捨てるこ  
とで生き方が楽になったことを実感していること  
を示す。

#### 4. グループ間の共通点と相違点

3つのグループから抽出された概念の対比による  
共通点、相違点を(表2)に示す。

#### 5. 中高年女性の加齢に伴う「獲得」の内容

{グループ1}{グループ2}{グループ3}から抽  
出された16の 概念名 をカテゴリー化し【自己  
中心性からの脱出】【感情を制御する力】【関係性  
のひろがり】【生きていく力】【適応していく力】  
の5 カテゴリーを抽出することができた。以下、  
各カテゴリーについて説明する。

##### 1)【自己中心性からの脱出】

自己中心性からの脱出とは、自分の立場や感情  
を中心に物事を考え行動するのではなく、相手の  
気持ちを推しはかり他者との関わりの中で物事を  
考え行動していくことができるようになっていく  
ことを指している。このカテゴリーは、相手を大  
切に思う 思いやりの心 自分の人生に感謝する

(表2) 3つのグループから抽出された概念の対比による共通点、相違点

グルー プ	3Gで共通の概 念		1.2G	1.3G	2.3G	共通性の無い概念				
	感謝 する心	耐える 力	自 律 する力	思いや りの心	他 者 から学 ぶ力					
1	感謝 する心	耐える 力	自 律 する力	思いや りの心	他 者 から学 ぶ力		冷静な 心	柔軟な 心	判断す る力	
2	感謝 する心	耐える 力	自 律 する力			血縁の つなが り	自分 を知る	誰かの ために 存在す る	考え方 の広が り	
3	感謝 する心	耐える 力		思いや りの心	他 者 から学 ぶ力	血縁の つなが り	信頼で きる友	親とし ての役 割	関係を 築く力	楽に生 きる



感謝する心 自分だけのためだけでなく誰かのために何かをしたい、何かができると感じる 誰かのために存在する の3つの概念からなる。

## 2)【感情を制御する力】

感情を制御する力とは、若者に多くみられるいわゆる“きれいな”という状態がなく、様々な環境、状況において自分の感情をコントロールし対応できる力を指している。このカテゴリーは、我慢する忍耐力 耐える力 感情的にならない 冷静な心 柔軟な心 状況を見極める 判断する力 の4つの概念からなる。

## 3)【関係性のひろがり】

関係性のひろがりとは、年齢を重ねていくなかで結婚による新しい家族の誕生、子育て、孫の誕生など血縁関係（家族）が増えていくこと、また血縁ではない友人（親友）を得ることで自分を取りまく大切な人々との関係がひろがっていくことを指している。このカテゴリーは、新しい家族の誕生を指す 血縁のつながり 友を得る 信頼できる友 子育てを振り返る 親としての役割 の3つの概念からなる。

## 4)【生きていく力】

生きていく力とは、社会の中で生きていくなかで他者から学びながら人間関係を築く能力を身につけながらも、誰かに頼り甘えて生きることから脱し自分で考え自律して生きていく力を指している。このカテゴリーは、自分で考え自らの意志を持つ 自律する力 自分の周りの人々から様々なことを得る 他者から学ぶ力 人間関係を円滑にできる 関係を築く力 の3つの概念からなる。

## 5)【適応していく力】

適応していく力とは、自分が生きやすいように考え方の発想を転換し、自分の能力を見極め、受

け入れながら環境、状況に適応し生きていく力を指す。このカテゴリーは、自分の能力を受け入れることや無知の知としての 自分を知る 考え方を柔軟にし発想を転換する 考え方の広がり 虚栄心などを捨て 楽に生きる の3つの概念からなる。

## IV．考察

### 1) 中高年女性の生き方の違いによる特徴

独身で仕事を継続している中高年女性の人生における獲得は、仕事を通しての自己成長に関する内容が主として語られていた。若いというだけでもはやされ注目された時を過ぎ、自分の頭で考えて行動しなければ組織のなかで生きていけないことを実感している。それは、自律して生きていく力の獲得につながっていた。また、ある女性は、組織の長になり組織をまとめ、部下を指導、育成する立場になったことで忍耐強さを身につけたと感じ、他の女性は教師として学生とかかわる中で若いころはすぐにかっとして怒ってばかりいた自分を振り返り冷静になれる、感情をコントロールできるようになったと感じていた。このような忍耐力や冷静さなど【感情を制御する力】はどの様にして獲得していったのだろうか。それを裏付ける概念として 他者から学ぶ が抽出された。これを象徴する言葉として「よく子育てをした人が子供から育てられるというけれど、私はそんな経験はなかったけれど仕事を通してかかわった多くの人に育てられたのかな」があり仕事が自分を成長させたと実感していた。

結婚子育てをしながら仕事を継続してきた中高年女性の人生における獲得は、仕事を継続する中で「研修を受けるたびに自分はなんて物知らず、なのだろう」と感じ、自分の能力はこのくらいだろうと客観視するなどを表わした 自分を知る の概念が抽出された。また、物事を否定的にみる

のではなく肯定的に考える発想の転換をすることができるなど考え方の広がりを獲得していた。子育てをしながら仕事を継続することは多くの困難や苦勞があったと推察されるが、苦勞をやりがいと考えるなど考え方の発想を転換することで乗り切ってきたとも思われる。自分の考えや意見を持ち主張できるようになる 自律していきっていく力を得たことは、独身で仕事を継続している中高年女性と共通の概念であった。これは、女性が仕事を通して獲得していくものであると推察される。また、「孫が生まれたこと、これが今一番の宝物」の言葉にあるように 血族のつながり を獲得していた。これは独身女性ではみられない概念であり、専業主婦と共通の概念であった。このように結婚子育てをしながら仕事を継続してきた中高年女性は、当然のごとく仕事、子育ての二つの視点から獲得を実感していた。

職業を持ったことがなく専業主婦で子育てをしてきた中高年女性の人生における獲得は、「苦しいときに話しを聞いてもらい愚痴を言い合える友を得た」との言葉にあるように、職場という人間関係の広がりが持てない専業主婦にとって、ご近所や身近な知人など限られた人間関係を大切に、その中からかけがえのない友を得て交流を大切にしている様子があった。河合は<sup>15)</sup>、女性における「人生の意味」意識を10歳代から70歳代の世代別に比較している。結果、青年群は人生に対する認識が最もネガティブな世代群であり年齢が上がるほどに人生に対するネガティブな認識を持つ者は少なくなるが、中高年群は、現在役割が曖昧であるにもかかわらず心理的安全性が高いのは、中高年群の「人生の意味」意識は目標を目指して行動することではなく、健康で家族に囲まれた平穏な日常に高い価値を置いていると思われる、と述べている。これは、今回の研究結果にもある、「ごく自然に結婚して二人の子供に恵まれて、無事大病もせず家族がみんな元気に過ごしていること

に感謝しています。ありがたいと思う。」や「結婚して42年ですが、あちこち身体は故障がきているんですが、寝込むとかそういうのはなくて、健康であることが、ありがたいという気持ち、幸せだと思う。」などの言葉とも一致する。職業を持たず、専業主婦として子育てをしてきた女性にとって健康で家族に囲まれた日常が幸せであり人生における獲得であることが推察された。

## 2) 中高年女性の加齢に伴う「獲得」

女性における発達をとらえる鍵概念は何であろうか。岡本は<sup>16)</sup>、アイデンティティ論から見た女性の生涯発達において、成人期のアイデンティティは「個としてのアイデンティティ」と「関係性にもとづくアイデンティティ」が等しい重みを持ち、両者が互いに影響を及ぼし合いながら発達していくものであると考えられる。と述べている。関係性にもとづくアイデンティティとは、自分は誰のために存在するのか、他者の役に立つのかを中心テーマとし、その特徴は、他者の欲求・願望を感じ取りその満足をめざす反応的行動（世話、思いやり）であり、関係性にもとづくアイデンティティの達成により生活や人生のさまざまな局面に対応できる力、危機対応力、自我の柔軟性、しなやかさが獲得される、としている。今回のインタビューからカテゴリー【自己中心性からの脱出】の概念 思いやりの心 誰かのために存在するが抽出された。「人のために何かできるってすごいことだな、と思うのね、自分のことだけじゃなくて、人のために・・・それは、家族だったり、友達だったり誰かのためにできるの、それが、年取ってくると自然体でできるようになってくるの。身に付いてくるのかな・・・人間はやっぱり、自己実現といってもそれは、人との関わりの中でのことだよ、だから、SMAPの“世界でただひとつだけの花・・・”とかいうのあるでしょ、あれは、確かに一面性はあるんだけど、あれは、やっぱり

若いときの認識よ。自分は、確かに一人だけなんだけど、他の人のことも考えられる。それが、年取ってくるとうことかな、と思うのね。」この言葉は、まさに人は人との関係性の中でしか生きられないことに気づき人とのかかわりの中で自分を生かすことの大切さを年齢を重ねて得たもの「獲得」であるとしている。これは子育てというケア役割と仕事の継続という生き方が影響しているのか、今後の検証課題である。

また、Erikson, E.Hは<sup>17)</sup>、第八段階「絶望と統合」において、「わが老年者たちのほとんどが、老年となった自分たちや友人たちを若い頃の自分や彼らと比較したときに気づく相違を取り上げることが出来る。多くの人たちにとって、それらの変化には、周囲の世界やそこに住む多種多様な人々への関心や許容量が増えた、という変化がある。若い頃より寛大になり、忍耐強くなり、心が広くなり、よく解るようになり、同情的になり、批判的ではなくなった」と表現している。言い方は様々であるが、多くの人的一致するところは「忍耐というものは、若かったころより年を取ってからのほうがよく解るものだ」と述べている。これは、今回の概念「冷静な心 耐える力 柔軟な心」が共通する。どの様な生き方をしてもその環境や状況において発達し獲得したものと認識していた。

加齢に伴い人は何を獲得していくのだろうか、という課題に基づき、さまざまに生き方の異なる中高年女性を対象にインタビューを重ねた。仕事を継続した女性は仕事を通し「自律する力」を獲得し、子育てを経験した女性は「血縁のつながり」を得ていた。また、どのような生き方をしてもその環境、状況のなかで「思いやりの心 耐える力」を獲得していた。年齢を重ねることは決して衰退、低下の一途をたどることではない。「獲得」の内容を明らかにしていくことは、高齢者理解の一助となるばかりでなく広く「生きることの価値」を考える基礎としての意義があると考えられる。

独身で仕事を継続している女性、結婚子育てをしながら仕事を継続している女性、職業を持ったことがなく専業主婦として子育てをしてきた女性を対象に加齢に伴う「獲得」を中心にその内容の比較を行ったが、本研究にはいくつかの課題も残されている。今後は、ここから明らかになった内容をもとに、より多くの中高年女性を対象にして量的に検証していきたい。

最後に快くインタビューに答えて下さった12名の方に心から感謝いたします。

## 引用文献

- 1) 保坂久美子・袖井孝子 1988 大学生の老人イメージ：SD法による分析．社会老年学，27号，22-33.
- 2) 大谷英子・松木光子 1995 老人イメージと形成要因に関する調査研究．日本看護研究学会雑誌，18(4)，25-38.
- 3) 大塚邦子・正野逸子・日浦瑞枝ほか 1999 看護学生の老人のイメージに関する研究：SD法によるイメージ評価と描画特徴とを中心に．老年看護学，4(1)，98-104.
- 4) 鄭鍾和他・金英淑・下垣 光ほか 2000 青少年の老人に対するイメージの日・韓比較研究：SD法による中学生・高校生の老人イメージ測定．社会福祉学，41(1)，163-174
- 5) 東 洋・柏木恵子・高橋恵子編 1993 生涯発達の心理学一巻 認知・知能・知恵 5章ポール・B・バルテス(鈴木 忠 訳)「生涯発達心理学を構成する理論的諸観点」．新曜社
- 6) 岡本佑子 2004 成人期・老年期における発達の研究の動向と展望．教育心理学年報，第43集，58-67.
- 7) 若本純子 2002 成人期・中年期における主観的老いの経験の検討．日本教育心理学会総会発表論文集，(44)，18.
- 8) Levinson, D. J. 1978 The seasons of a man's life. New York through Tuttle-Mori Agency, Inc. Tokyo (南 博 訳 2003 ライフサイクルの心理学上・下．講談社)
- 9) 柏木恵子・高橋恵子 1998 発達心理学とフェミニズム．ミネルヴァ書房
- 10) 難波淳子 2000 中年期の日本人女性の自己の発達に関する一考察 - 語られたライフヒストリーの分析から - ．社会心理学研究，15(3)，164-177.

- 11) Levinson, D. J. 1996 The seasons of a Woman's life. New York: Alfred A. Knopf.
- 12) 岡本祐子 2002 女性の生涯発達とアイデンティティ. 北大路書房
- 13) 堀内和美 1993 中高年女性が報告する自我同一性の変化 - 専業主婦, 看護婦, 小・中学校教師の比較 - . 教育心理学研究, 41 (1), 11-21.
- 14) 加藤礼子・金子勲榮 2002 成人女性の生きがい感に関する要因について. 日本教育心理学会, (44), 15
- 15) 河合千恵子 1982 女性における「人生の意味」意識 - 世代比較的研究 - . 社会老年学, 15号, 52-63.
- 16) 岡本祐子 1990 アイデンティティ論から見た女性の生涯発達. 日本教育心理学会総会発表論文集, (41), 98.
- 17) Erikson, E. H. 1986 Vital Involvement In Old Age. W. W. Norton & Company, N.Y., (朝長正徳訳 2002 老年期. みすず書房)
- 18) 木下康仁 1999 グラウンデッド・セオリー・アプローチ; 質的実証研究の再生. 弘文堂
- 19) 木下康仁 2003 グラウンデッド・セオリー・アプローチの実践; 質的研究への誘い. 弘文堂
- 20) 南 裕子 1999 質的研究の基礎; グラウンデッド・セオリーの技法と手順. 医学書院
- 21) やまだようこ 2002 人生を物語る; 生成のライフストーリー. ミネルヴァ書房
- 22) Havighurst, R. J 1953. Human Development and Education. Longmans, Green & Co., INC. New York  
 荘田雅子訳 2000 人間の発達課題と教育. 玉川大学出版部
- 23) 無藤 隆・やまだようこ編集 1995 生涯発達心理学第一巻 生涯発達心理学とは何か. 金子書房
- 24) 山口智子 1996 高齢者の回想: 主観的幸福感・時間的展望との関連. 名古屋大学教育学部紀要, 43巻, 163-173.
- 25) 下仲順子・中里克治 1999 老年期における人格の縦断研究. 教育心理学研究, 47 (3), 293-303.
- 27) 野村晴夫 2002 高齢者の自己語りと自我同一性との関連. 教育心理学研究, 50 (3), 355-365.
- 27) 五十嵐敦・氏家達夫 1999 中年期における心理社会的身体的変化に対する適応過程に関する縦断的研究. 福島大学生涯学習教育研究センター年報, 第4巻, 27-47.